〔和爾雅一天文〕弦七八日爲上弦、廿二三爲下弦、　恒月出詩經

〔八雲御抄三上天象〕月○中略　ゆみはりの月非三日月、半月也、是故人説也、

〔藻鹽草一天象〕月　月弓　弓はりの月の字なくても云也、月の事也、三日月にあらず、　かみの弓はりの月七日八日の夕附夜　玄もの弓はり廿二日廿三日

〔倭訓栞中編二十七由〕ゆみはりづき　弓張月なり、上弦下弦をすべていふ也、詩の注に、八九日月體半昏而似弓張、而弦直謂之上弦、釋名にも若張弓弦也と見えたり、日本紀には弦をゆはりとよめり、新撰古今集に、弓張の半はの月とも見えたり、

〔暦林問答集下〕釋弦望第二十六

或問、弦望者何也、　答曰、暦例云、上弦者陽光漸照、陰體未成而遲速交際也、又云、望者陰陽相對者、月正滿而交在望、下弦者陽明漸消、而陰體在半也、月獨無光、依日之照有明、其陽成於三日、故月初三生於小明、而見西天、因弦朔與望半、爲上弦、日光照月之半、其形似弓、故云弦、又弦之後、大陰之位盈、而正相對於太陽之照、故月圓滿也、謂之望、又望之後、月漸近日、是故日月不相對、而月漸虧也、望與晦半、月又半也、下弦者至晦而月光死、而至朔而月蘇也、其朔者日月正交會之辰也、

〔大和物語上〕おなじみかど醍醐○の御時、躬恒をめして、月のいとをもしろき夜、御遊びなどありて、月を弓はりといふは何の心ぞ、そのよしつかうまつれとおほせ給ひければ、みはしのもとに侍ひて、つかうまつりける、

てる月を弓はりとしもいふ事は山べをさしていればなりけり○又見大鏡

〔平家物語四〕鵺の事

折ふしころは卯月十日あまりの事なれば、雲井に郭公二聲三こゑをとづれてとをりければ、左大臣殿、○藤原基實